

◆◆◆◆◆ 映像技術室 ◆◆◆◆◆

映像技術室の発足

映像技術室は昭和61年4月、写真技術班にエレクトロニクスショップの一部が加わり発足した。これに伴い管理運営にあたる写真委員会も映像技術委員会に名称を変えた。この合併の主なねらいは需要増加が見込まれる電子映像部門のサービス機能の強化と漸減する共通施設職員の統合化にあった。

以来3年が経過、現在は室長（併任）のほか4名の室員で一般写真、映画（高速度映画を含む）、オープン機器管理、ビデオ、映像およびエレクトロニクスの相談、経理事務など多種類の作業を処理しており、受付件数は月平均290件に達している。

新業務のビデオについては、まだ十分な設備は整わず本格的な作業に入っていないが、初年度から生研公開時には第一、第二会議室の講演をUHF（現在は有線）により各部会議室に放映し見学者の便利を図った。また日常業務としては研究室の依頼に応じ撮影、編集、タイトル作成、ダビングなどの作業を行っている。

写真・映画業務の変遷

30周年誌までは写真・映画業務に関する紹介欄がなく残されている記録も少ないので、この機会に変遷の概略を述べることにする。

写真設備は昭和17年の第二工学部開学後いち早く図書掛内に付置され、主に外国文献の複写を手がけていた。翌年には講堂内の部屋に移転し中央写真室と呼ばれていたが、正式に写真掛として独立したのは生研に転身後の昭和26年4月である。同時に写真委員会も発足した。

昭和31年には高速度写真委員会が写真委員会と合併し、写真掛に高速度写真室が付置され、高速度カメラ、16mm撮影機、各種閃光装置などが移管された。

このころからロケット実験では記録写真ばかりでなく、記録映画の撮影、高速度映画の撮影・解析も担当するようになり、宇宙航空研究発足後の昭和39年8月まで実験に参加した。

昭和38年8月には全国の大学に先駆けて静電式複写機ゼロックス914型を導入しコピーの迅速化と多量作成を可能にした（昭和51年に閉止）。

昭和40年代に入ると学会の発表形式がビラからスライドに変わったが、当時は撮影に適さない原稿が多く質のよいスライドは少なかった。そこで「スライド原稿の作り方」、「スライド原稿の書き方・写し方」などを発行し、品質の向上に努めた。これらのパンフレットは他学部、他大学でも利用された。

ロケット後の映画作業では、ファイバースコープによる「溶鉱炉内部観察」、一連のゼラチン模型による「地殻変動」などの高速度映画撮影がある。

昭和51年7月、写真掛は事務部から分離し写真技術班に改組、掛員は事務系技官から教室系技官に異動した。

最近10年の歩み

この10年間は定員が減少する一方、研究サイクルが短くなり緊急作業が増加したためオープン機器を導入し対処することにした。

スライドについてはすでに昭和50年に即製作成機を設置し、その後にも増設したが、昭和58年ごろから各学会の発表がOHPに切り替ったため、即製スライドはここ数年著しく減少している。

提出論文の完全版下化が一因となって昭和56年には拡散転写方式の暗室型多目的（製版用）カメラを設置した。このカメラは凶面、写真、網掛けが任意のサイズに変えられるほか品質がよく、写真のOHPも作成できることなどから利用度が高く、昭和62年には明室型カメラを増設した。

カラーコピー、カラーOHPに対しては写真方式の複写機をレンタルで導入し需要に答えている。

一般写真は範囲が広く難易さまざまであるが、特色ある作業としては、独自に製作したカメラでICマスクの乾板撮影を行っていること、たんなる撮影・引き伸ばしばかりでなくレイアウトの依頼を受け学術写真展の入選に寄与していることなどがある。

映画関係では「ERSの活動」を始め、高速度、微速度映画の撮影を担当してきたが、今後は特殊な撮影以外はビデオに置き換わるものと推定される。

映像技術室にとってはビデオの設備と技術の充実が目下の急務である。